

《入選》

水の声

大阪府 大阪府立水都国際中学校 3年 村上 市香 むらかみ いちか

私は水だった。大地に染み込み、雲となり、雨となり、再び川へと還る。人の手にすくわれ、飲み水となり、田畑を潤し、また流れ出す。私は流れ続けることで世界を形作ってきた。しかし、今、私は苦しんでいる。私は濁り、汚され、奪われ、時には争いの種とされている。

かつて、人は私を敬っていた。日本では神社の手水舎で私と向き合い、茶道では一滴一滴の価値を味わった。江戸時代の町では「水道」と呼ばれる木製の水路が庶民の暮らしを支えていた。海外でも、ナイル川の恵みでエジプト文明が栄え、ヨーロッパの街々では噴水が豊かさの象徴とされた。

しかし、時代が進むにつれ、人は私を「当たり前なもの」と考えるようになった。かつて私をすくった人々の手は、今、私を汚す手になってしまったのだ。そして今、私は悲鳴を上げている。

世界では水不足が深刻化している。地球上の水の九十七％は海水であり、淡水はわずか三％しか存在しない。そのうち人が利用できるのは更に少ない。しかし、人々は私を浪費し続ける。農業や工業では大量の水が使われ日本も食料生産のために海外の水産物を消費している。水は無限ではなく、人々はこの貴重な資源を使いすぎている。

さらに、私は汚染され続けている。プラスチックごみが川や海を埋め尽くし、細かく砕けたマイクロプラスチックが生態系を脅かす。特にインドのガンジス川や中国の長江では、大量の廃棄物が流れ込み、深刻な水質汚染が発生している。これらの問題が私の力を奪い、人々の健康をも脅かしている。

そして、気候変動も私の姿を大きく変えつつある。地球温暖化の影響で降水パターンが乱れ、干ばつと豪雨が極端に発生するようになった。二〇二四年、アフリカのエチオピア・ケニア・ソマリアでは記録的な干ばつが続き、二〇〇万人以上が水不足と食糧危機に直面した。一方で、

日本でも二〇二〇年の熊本豪雨では球磨川が氾濫し、多くの家屋が流された。私の存在は、もはや穏やかなものではなく、人々に大きな試練を与えている。

私と人々はこのまま滅びてしまうのだろうか。いや、まだ希望はある。

人々がかつての知恵を思い出すべきだ。江戸時代の人々は、水を循環させながら使い、無駄のない暮らしをしていた。現代でも、雨水を貯めて利用する技術を発展させることで、水資源を有効に活用できる。シンガポールでは「NEWater」と呼ばれる高度な再生水技術を導入し、飲料水の大半をリサイクルしている。また、都市では排水システムを効率化し、雨水を蓄えるためのインフラが強化されつつある。

最新技術も私を助ける力を持っている。イスラエルでは高度な海水淡水化技術を活用し、国内の水供給の約六〇％を海水から確保している。さらに、水を汚さない社会を目指すことも重要だ。環境に配慮した製品の選択、生活排水の改善が急務である。無駄な水を流さず、一滴の価値を再認識すること。日常生活の中で水の無駄使いを減らし、リサイクルを意識的に実践すること。それを家庭内で、次世代を担う子どもに伝えることが、私や人々を守るための第一歩だ。

私は流れ続ける。かつて人々に恵みをもたらし、これからも世界を巡る。だが、その未来が澄み渡ったものであるか、それとも汚濁に満ちたものであるかは、人間次第だ。

私は問いかける。「あなたは水について、どのように考えるだろうか。」